

この連載で日本のエスペランティストを何人が紹介してきましたが、伊東三郎は私が警咳に接し、少しばかり親しくお付き合いをさせていただいたエスペラント界で名の知られた人としては初めての人です。

中央労働学院でエスペラントの講演会があると叔母が教えてくれ、叔母と共に出席して初めて伊東三郎の話を聞きました。参加者は50人もいたかどうか、小さい集会でした。その時の話の内容は忘れましたが、白髪で鼻筋が通った端正な顔立ち、「キリストも斯くや」かと思わせるような風貌でした。伊東については最後まで、その印象が消えません。

▶ 常に志が高く

私が1968年、ヨーロッパへ行こう、と思った時、伊東はわざわざ電話をかけてきて、自宅に来ないかと誘われました。本郷の東大の赤門付近のみすぼらしい木造アパートに伊東夫妻は住んでいました。このような木造アパートはもう取り壊されていることでしょう。経済的に潤ってはいないことが一目でわかりました。

「赤貧洗うがごとし」という言葉がぴったりくると言っても伊東を貶めることにはならないと思います。それよりも、金があろうがなかろうが、そんなことは人間の価値とは何ら関係はない。その人の持つ高い志と崇高な行動にこそ人間の価値があるのだ、と伊東から直接そのような言葉を聞いていませんが、その行動、風貌がそう言わせていたように私には思えます。事実、伊東はそういう浮世のしがらみから解放されていた人だった、と見えました。

その時の話の詳細は忘れましたが、エスペラントを盛り上げるために、なんらかの会を立ち上げよう、私の身の丈に合わないような壮大な話ではなかったか、と思います。伊東はしばしばそういう類の

話を絶えず話す人だったのでしょう。

伊東と親しい年下のある男が「総会屋みたいだな」と、ある会合で本人を前にしてそんなことを言ったことがありました。伊東はそんな言葉を聞いても馬耳東風と聞き流していました。それでもある時、いつも皮肉交じりに言う彼に対して、「お前は・・・」と怒ったことがあると聞いたことがあります。それもまた人間的な側面だったと思います。

▶ 一体それが何だ！

『高く たかく 遠くの方へ』という伊東の遺稿と追憶の書から伊東の姿を描写しましょう。「Vantajn vortojn for! 煙に巻かれないこと」と題されたエッセイはこんな内容です。

「世界大会へ行ってきた諸君のみやげ話が、たいていヨーロッパのエスペランティストがエスペラントを自由自在によくしゃべるという感嘆であることは深く一考を要する。ぼくは実際そんなに感心しなかった。エスペラントを自国語なみにべらべらしゃべっても、一体それが何だ。エスペラントの単語や文法が概してヨーロッパ風だから、それに安易に依りかかって、べらべらやっても、それが果たして本物といえるだろうか。ぼくはむしろヨーロッパ風でない世界観や言語感覚の問題をも、対置し、ヨーロッパ流の限界に注意を喚起し、世界に対する理解を要請した。

はじめ、かれらは日本人はしゃべるのがへただといったから、ぼくは東洋人の基本態度は無言で核心を伝達することで、しゃべるのは必要悪と心得ている、西洋人はさかんにしゃべるが、はたして核心の問題をどんなに心得ているかと反問すると、かれらは啞然とし嘆声を発し、話の主導権はこちらに移るのだった。

しゃべるのが能ではない。問題は真剣に世界を

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」
第十七回 洗いさらした木綿のような人 伊東三郎
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』
大類善啓(おもしろいよしひろ)

考えているか、どうかだ」

そして伊東はかつて、あるヨーロッパ人にこんな詩を送りました。エスペラントで書いたのですが、ここは小原孝夫訳で紹介しましょう。

「くこの生きているほんとうの花/よく観よ、なんとうつくしい/これが、われらの心をよろこばすものなら/ただ、やさしくほほえみかわそう/余計な言葉を捨てさって」

かれはにっこりとよろこんでくれた。

日本でも世界でも、煙に巻かれないで核心をつくエスペラント運動を進めようではないか」

➤ 老荘の徒

1932年9月から1933年5月頃に書かれた〈ある人の手紙〉という文章の中に、こんなことが書いてあります。

「僕は中学時代から、否小学時代から、儒教の色の染み込んだ修身や教訓に物足りなさや疑惑を感じて、老荘の道を好んで追及した。立身出世をせよとの大人の教えに疑問を抱いて、僕は百姓になるとか、肥取りになるとか、仙人になるとか言っては父や伯母を嘲弄して来た。それはもう子供のときからだ」

伊東の詩に、こんなのがあります。

「父よ/私は大学教授にもなりませんでしたし/博士にもなりませんでした/私は将軍でもなければ/提督でもありません/私には黄金もなければ/栄光もありません・・・」

高杉一郎の著作『中国の緑の星 — 長谷川テル反戦の生涯』には、高杉が中国の葉籟士というエスペランティストと1960年に街を歩いていた時、葉が突然、この詩句をエスペラントでそらんじたと記しています。葉は、高杉を振り向いて「あの詩人はまだ生きていますか?」と尋ねました。それは伊東のエスペラント詩集『VERDA PARMASO (緑葉集)』の巻頭を飾っている父への献辞でした。

高杉は「ええ、生きていますよ。戦後は、もっぱらエスペラント運動の宣伝家として働いているようです」と答えながら、この詩人の幸せを心から羨ん

だと書いています。

「彼がえらい政治家や金持ちや学者にならなかったとって、それがいったいなんだろう。私たちにとって思い出すことさえつらい日中戦争の十数年を越えて、ひとりの中国人の心のなかに『あの詩人』と、憎しみをもってではなく、なつかしさをもって生きつづけることのできた伊東三郎の光栄を、私は心の底から羨ましいと思ったのであった」と記しています。

こういう文章を読むと、私自身がささやかながら、伊東と交流があったことをとても良かったと思うと同時に、埴谷雄高との交流などを含めて、もっともっと聞きたかったことがあったのに、とも思いました。

➤ 洗いさらした木綿のような人

伊東はエスペラント界では有名でしたが、世間的にはほぼ無名のような存在だったと言えるでしょう。しかし伊東が亡くなった後、ささやかな追悼会が開かれ、また埴谷らも参加した『遺稿と追憶』の出版記念会だったかに参加したことを今改めて思いだし、伊東の高潔な人柄を思い出しています。

『遺稿と追憶』には多くの人たちが原稿を寄せています。そのすべてを紹介できませんが、大本教の幹部だった今は亡き伊藤栄蔵がこんな風に回想しています。

「伊東三郎という人は、稀に見る純粹人であった。こんな人を本当の詩人というのであろうか。もっとも、夢ばかり追っている理想主義者というのでなく、何とか現実化してゆこうとする意欲と才能も持っていた。(中略)『事業化』の才能はあったかも知れないが、世渡りは上手でなかった。私が出会った何回のうち、ただの一度も、懐中の豊かそうな伊東さんを見たことがない。痛々しいほどの清貧ぶりであるが、しかしそれを苦にした様子は少しもなく、洗いさらした木綿のような、慎ましく、さっぱりした人柄が出ていた。こんな人はエスペラント界ばかりでなく、一般社会にも沢山はいない。それだけに私は限りなくなつかしく慕わしいのである」